

## 週日の説教

金 大烈 神父 2008年12月16日(火)

《弱くなったときこそ、イエス様に会えるチャンスです》

今日の福音(マタイ 21:28 - 32)で、なぜイエス様はこのようなたとえ話をされたのでしょうか。話の中には二人の兄弟が登場しますが、四人の兄弟にして、たとえば「はい」と答えて従った人と「嫌です」と答えて行かない人とを加えて話した方がもっとよかったのではないかと話したことがあります。

今日は違う観点で、違う角度で考えてみたいと思います。

なぜ兄が「嫌です」と答える役で、弟が「はい」と答える役になったのでしょうか。ヒントは、このたとえ話は、4つの福音の中でマタイにだけ載せられているということです。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの4人の福音作家の中で、本当のユダヤ人はマタイだけです。他の人たちは異邦人でした。

この話の続きは、「あなたたちより徴税人や娼婦達のほうが先に天の国に入るだろう。」と書いてあります。この話で叱られるのは律法学者達です。彼らはずっと正しい生き方をしているし、神様の教えを守ってきたと信じていました。ある意味で傲慢な人々です。しかし、客観的にみると彼らが表面的に犯した罪はほとんどありません。そして先に天の国に入るかもしれないと言われた徴税人や娼婦達は、どういふことをしたのでしょうか。その当時、イスラエルはローマの植民地で、ローマに支配されていました。徴税人というのは、自分の国民からお金を奪い、ローマに与えてその利益をとって生活をしていました。だから同じ民族のユダヤ人の立場でみたらこれは悪い人です。また、律法的に厳しく禁止されていたのが売春です。

ですからこの二つの職業の人々は、イスラエル人にとっては一番悪い人々でした。また、実際に彼らはよいことをしてはいませんでした。けれども、洗礼者ヨハネが「悔い改めましょう」と言うからは、自分の罪を悔いて洗礼を受けたわけです。しかし、正しい生き方をしていると思こんでいる律法学者などの人々は、洗礼者ヨハネをこぼみ、イスラエルの人々を迷わせてしまうからと言う理由で、ヨハネを殺そうとしました。洗礼者ヨハネは、「私はこの後来る方のはきものの紐さえとく資格がない。私より何倍も立派な人が来られる」という話をします。この話を聞いた既得権を持っているあらゆる人々は恐れしました。

今日の福音で最初に兄が「嫌です」と言いながらも従ったのは、「あなたは正しくない。」と叫び、人生に恨みを持ち、めちやくちやに生きていた人を意味します。しかし、「悪かった」と自ら悔い改め、「あなたに委ねます。私の罪を赦してください。」と懇切な願いを持った人々です。

「はい」と答えて結局行かなかった弟というのは、ファリサイ派の人々や律法学者達のように「私はきちんと要理などを守り、いつもあなたのみ旨に従っています。」と考え、「はい」と言いながらも結果的には神様の御心から外れてしまった人々を例えています。

皆様、私たちも同じ誘惑に陥っています。これは死ぬまで、命が終わるまでいつも警戒しないと行けないことです。へりくだること、低い心を持つことができれば最後に成功の人生を過ごせたと喜ぶことが出来ます。しかし、私たちの中にはいつも、「自分の考えやふるまいが正しい」、「相手が間違えている」と怒りを感じ、責めようとする心があります。これは本当に陥りやすいわなです。

私たちは倒れなければ、立ち上る大切さや恵みが分かりません。いつも立っているのに、立てることがどのくらい恵まれているか分からないのです。倒れてしまい、手も動かなくなってしまって初めて、どのくらい神様の愛情があるのかがわかるのです。悔い改めましょう。神様は数えきれないくらいの印を送っています。しかし、気づかずに過ぎてしまっているのが私たちではありませんか。「全てのことに耳を傾けさせ、神様のみ旨を分からせてください」と祈りましょう。弱くなった時こ

そ、本当にイエス様に出会える一番素晴らしいチャンスであることを信じてください。

この世の中で、つらい思いを持たない人はいません。しかし、同じつらさを持っていても顔を輝かせている人といつも人のせいにして暗い顔をしている人がいます。

できるだけ神様に委ねる心もち、明るい顔で過ごせる信者になりましょう。

ありがとうございました。